

調査団体名	NPO法人 恵那山みどりの会	団体代表者名	柴田満
設立年	2001年	団体URL	http://www.midorinokai.cleans.jp/
活動地域	中津川市	調査員	杉野
取材日	2009/11/18	レポート作成者	杉野賢治
恵那山は私たちの心のふるさと			
<p><活動内容></p> <p>1)環境の保全を図る活動 2)地域安全活動 3)子どもの健全教育を図る活動 4)前各号に掲げる活動を行う団体の運営または活動に関する連絡、助言または援助の活動。</p> <p>恵那山みどりの会は次の3事業部から構成されている。</p> <p>■森づくり部:森林・竹林整備。中津川周辺地域において、私有林の人工林間伐、東濃森林管理署と「ふれあいの森事業」協定を締結し、神坂国有林の間伐など、国・個人・地域・民間企業から委託され、森林整備を行っている。</p> <p>■森林資源活用部:神坂作業場にて、復活した炭窯での炭づくり。年間1~3tの木炭を製造。薪ストーブ用の薪づくり(コナラ)、炭焼き体験塾の開催、シイタケ原木づくり。</p> <p>■教育部:「森の学校はっぱっぱ」を月2回土曜日に開催。自然体験を中心とする環境教育で、内容は多岐にわたる。</p>			
<p><会のモットー(何を大切にしているか)></p> <p>山の中で楽しく。大人も子どもも、自然から学ぶ。</p>			
<p><設立から現在に至るまでに変化したこと></p> <p>設立当初は間伐作業が多かったが、広葉樹の植樹、家の周りの立ち木の伐採や竹林整備が増えてきた。教育事業部に関しては、参加者の低学年化が目立つようになってきた。最も変化したことは、会員数で、当初は60人ほどだったのが現在は250人に。</p>			
<p><連携している団体・専門家・自治体など></p> <p>中津川市、国(東濃森林管理署、国土交通省)、岐阜県</p>			
<p><今までに行った調査・研究></p> <p>四ツ目川上流部の市有地の割山地主80戸の実態調査・竹林整備(各所)のデータ</p>			
<p><現在直面している課題></p> <p>会が大きくなったがゆえの問題がある。会員数の増加に伴い、事業が広がり、事務的な仕事も増える。当然経費がかかる。継続的な事業活動がないこと、恒常的な助成が得られないこともあり、結果的に財政が常に問題になる。助成金の総額は8年間で2千万円を超える。森林整備などの「仕事」を取ってこようとすると、整備を思い立つ所有者も、会の提示する経費に尻込みをする。当会の作業員日当は森林組合などに比べれば格安なのだが、機械(チップパーなど)を使えば経費がかさむ。公共的な受託作業がいつもあるわけではなく、難しい状況である。また、当会においても、会員の高年齢化(70歳代が多い)が問題であり、青年層をいかに取り込むかが課題である。</p>			
<p><今後やってみたいこと></p> <p>今の事業部を充実させたい。本格的な間伐などの森林整備。</p>			
<p><そのためにはどんな情報・人脈が必要か></p> <p>資格者を増やすこと。ボランティアの参加を促すこと。公共事業が受託できる体制確立。後継者の育成。</p>			
<p><チームオリジナルの質問></p>			
質問内容:	流域との関わりは?		
答え:	木曾川の上流と下流を結ぶ体験ツアーの実施など、積極的に活動している。会員が高齢者であるということは、知恵者たちの集まりであるということ。山の知恵をまちの人たちに伝えるような取り組みをしている。神坂作業所には、たくさんの人が見学・体験に来る。少しずつでも広げていきたい。		

<その他、伝えたいこと>

恵那山は、崩落地の白さが目立ち、日に日にその数や広さが増しているように見える。歌にもあるように、三度振り返って旅立った恵那山は、私たちの心のふるさとともいえる山です。日本百名山の一つである恵那山は母なる山です。その恵那山が今、瀕死の重病人であるとすれば、子どもたちは見捨てることはできません。手厚い看護が必要です。もし見捨てた場合、崩れやすい花崗岩の岩肌は大雨により、いつ土石流となって中津川市街を襲うかもしれません。昭和7年(1932)の四ツ目川大災害の二の舞も起こりそうな気配です。現在の森林は、森林の本来の役目を果たしているとはいえません。

「国を治める者は、山を治める。国を治める者は、水を治める」。治山治水の時代はどこへ行ったのでしょうか。私たちの暮らしはどうなるのでしょうか。NPOを立ち上げ、行政や森林管理署、森林組合、その他、山づくりの専門家の方々の知識や技術をお借りして、最善を尽くしましょう。山をもう一度価値あるものとしてよみがえらせてみたいものです。21世紀は心の時代と言われています。物質文明によって損なわれた心にとって、森は癒しの場です。豊かな自然の中での体験は、きっと豊かな知恵づくりに役立つでしょう。私たちは物から生まれたのではなく、自然から生まれたのですから。

～前理事長・近藤愛子氏の言葉より～

当初、上流域最大のNPO団体という印象で取材に伺ったのだが、理事長の柴田氏、理事の河内氏の話を知っているうちに、このNPOは本物であり、本物だからこそ、人が集まるのだと感じた。中津川市街地に事務所があり、頻繁に来客がある。事務所の中は薪ストーブで暖かく、出迎えるスタッフの方々の丁寧な対応に驚かされる。事務所隣の部屋はギャラリーになっており、子どもたちの作品が展示されている。



ギャラリー展示



炭窯